

## 基礎研究に基づいた教材分析試験

—「叙述類型論」に基づきながら—

岩男 考哲

### 1. はじめに

基礎研究と（実践も含めた）応用研究の連携の在り方という課題は古くて新しい問題である（この「古くて新しい」という表現も古くて新しい表現である）。

基礎的な専門知が実践・応用よりも優れているということは決してないし、逆に専門知が不在の場で実践だけが行われてもアドホックなやり取りが繰り返されるだけで、教育界、延いては世界の発展にはつながらない。両者ともに教育の場において欠かせない存在であるはずだ。

本稿ではこうした前提に立ち、言語学を専門とする人間が近年盛んに議論されている専門的な概念に基づいて教材を分析するとどういった指摘ができるかを述べてみたい。

本稿の構成は次の通りである。まず2節では、本稿で主要概念となる「叙述の類型」という概念の導入を行う。次に3節では、小学校国語教科書（ここでは、本学会本部の所在地が長野県であることを意識して、光村図書を扱う）の語彙に注目し、その特徴を指摘する。そして4節では叙述の類型の観点から3節の結果を分析すると何が分かるのかを述べる。5節は本稿のまとめである。

### 2. 「叙述の類型」

まずは、この2節で近年言語研究の場において活発な議論が行われている「叙述の類型」という概念の概説を行うことにする。

活発な議論が行われているということは、それだけ多様な考え方が提示されているということであるが、当然ながら、それら全てをここで網羅す

ることはできない。本稿はあくまでも、教育の場とのつながりを意識して書かれるものであるため、細かい議論には立ち入らず、教材分析において有効だと思われる範囲の概説に留めたい<sup>(1)</sup>。

なお、叙述の類型とは当該の文全体が述べる事柄を扱う理論であるので、文の述語が主な考察対象となる。

## 2. 1 叙述の類型とは

現代語研究における叙述の類型という概念のルーツは、佐久間鼎の研究にまでさかのぼると言われている（佐久間（1941））。そしてその後、佐久間の研究を引き継いだ三上章や益岡隆志らによって発展を遂げてきた（三上（1953, 1963）、益岡（1987）、益岡編（2008）、岩男（2019））。それが近年、より活発に議論が行われるようになり、様々な研究成果が報告されている。

ここでは特に、益岡隆志の知見に基づきながら、叙述の類型（叙述類型論）という概念を紹介していく。

叙述類型論では、文のタイプを大きく2つに分ける<sup>(2)</sup>。

1つ目は〈属性叙述文〉である。属性叙述文とは、時空間上に位置付けられない事柄、つまり「所与の対象が有する属性（特性・性質）を叙述する（益岡（2013: 57））」文のことを言う。具体例としては、次のようなものが挙げられる。

- (1) 人間は哺乳類だ。

これは「昨日」や「来年」のような時間軸上に位置付けられる事柄でもなければ、「神戸」や「長野」のような空間上に位置付けられる事柄でもない。

2つ目のタイプは〈事象叙述文〉である。事象叙述文とは、典型的には時間軸上のどこかで発生する（した）動的な出来事を表す文のことを指す。具体例としては、つぎのような文が挙げられる。

- (2) さっき、岩男がキッチンで珈琲を淹れた。

これは「さっき」や「淹れた」といった過去を表す語が共起していることから分かるように、時間軸上の特定の位置に生じる出来事であり、かつ、「キッチンで」から分かるように、特定の空間上に位置付けられる出来事でもある。

叙述の類型という理論を扱うにあたり特に重要となるのは、この2タイプの文が存在することを理解することである。次に、この2つのタイプの表現と品詞との関係について概観しておこう。

## 2. 2 叙述の類型と品詞

先に述べたように、叙述の類型という概念を理解するには、〈属性叙述文〉と〈事象叙述文〉という2タイプの文が存在することを知ることが重要である。

これをふまえて次に本節で概観したいのは、これら2つの文と品詞との関係である。まずは、属性叙述文から見ていくことにしよう。

属性叙述文は、その述語に（典型的には）名詞がくるとされている<sup>(3)</sup>。具体例でこのことを確認しておこう。

(3) 神戸市外国語大学は、単科大学だ。

「神戸市外国語大学が単科大学である」という事柄は、特定の時空間上の出来事ではない。このことは、次のテストでも確認できる。

(3') \*昨日、神戸市外国語大学は、単科大学だった。

(3'') \*大阪では、神戸市外国語大学は、単科大学だ。

つまり(3)は属性叙述文である。

ここで述語に注目したい。日本語は、名詞が単独で述語にくることはない（話し言葉では例外的に可能な場合もあるが）。名詞が述語に用いられる場合、「名詞＋だ（です／である）」が基本形である。よって、(3)は「単科大学だ」と名詞述語の文であることが分かるだろう。

次に、事象叙述文と品詞の関係について述べる。

事象叙述文は、その述語に（典型的には）動詞がくるとされている<sup>(4)</sup>。  
具体例を見てみよう。

(4) 岩男君が珈琲を飲んだ。

「岩男君が珈琲を飲んだ」という事柄は、特定の時空間上の出来事である。このことは、次のテストから明らかである。

(4') 昨日、岩男君は珈琲を飲んだ。

(4'') 岩男君は神戸で珈琲を飲んだ。

このように、(4) は事象叙述文であることが確認できる。

この文の述語に注目されたい。「飲んだ（飲む）」は動詞である。このように、事象叙述文は典型的には動詞を述語にとる文なのである<sup>(5)</sup>。

以上、本節では本稿の議論で重要な概念となる叙述の種類の概説とその概念と品詞との関係について導入を行った<sup>(6)</sup>。

### 3. 教科書における語彙

次に本節では、小学校の国語教科書（光村図書）に出現する語彙について、先行研究の知見、ならびに本稿の調査結果を紹介する。

まずは、先行研究の知見を紹介する。COSMOS の調査<sup>(7)</sup>によると、小学校第一学年の国語教科書に現れる語彙を品詞別にみると、「7 割が名詞，2 割が動詞」（残り 1 割がその他の品詞）という結果が得られるという。この傾向は出版社を問わずいずれの教科書でも同様であるため、本稿の考察対象である光村図書も同じ内容だと言える。

そこで次に、本稿で行った調査について述べる<sup>(8)</sup>。本稿では、動詞、名詞の各品詞が述語で用いられている文がどのくらい現れるかを調査した。

まず、小学校第一学年の調査結果から見ていこう。この学年の国語教科書において、動詞が述語として用いられている文は、65 例見られた。そ

れに対して、名詞が述語として用いられるケースは少なく、3例にとどまった<sup>(9)</sup>。

このように、それぞれの品詞が述語として用いられているケースをカウントすると、先の「名詞7割、動詞2割」という品詞の出現傾向の結果とは逆転することが分かる。そしてこのことは、小学校第一学年の教科書に登場する名詞の大部分は、対象の属性を述べるためではなく、その出来事の登場キャラクタ（「登場人物」だけではなく、動物が登場することもあるので、「キャラクタ」と言うことにする）を指示するために用いられていることが分かる<sup>(10)</sup>。

次にこれが、小学校第二学年になるとどうだろうか<sup>(11)</sup>。

まず動詞述語を調べると、その数は50である。それに対して、名詞述語の数は5例で、これも第一学年と大差は無い

そこで学年を一つとばして、第四学年を見てみよう<sup>(12)</sup>。

この学年で動詞が述語に用いられる例は143例確認できた。一方、名詞が述語の例は21例である。

動詞述語に対する名詞述語の数がこれまでに比べて増えていることが分かるが、それでも、動詞の数と比べると、圧倒的に少ないと言えるだろう。

以上、本節では先行研究の知見、ならびに本研究の調査結果を述べて来た。そこで分かったことは、小学校第一学年の国語教科書に出現する語彙は名詞が圧倒的に多数派であるが、それを述語に限定して考えるとその数は逆転し、動詞の方が多数派となるということであった。そして、その傾向は学年を追っても変化していなかった。

次節ではこれらの調査結果を叙述の種類の観点から見ることで何が言えるかを考えたい。

#### 4. 調査結果と叙述の類型

本稿ではこれまで、教科書に現れる文の述語に用いられる品詞は、動詞が圧倒的に多数であることを確認してきた。

とは言えここで、「それを補うために、授業内では名詞述語文を重点的に学習するべきだ」等と発言するつもりはない。言語学はそういった言語に対する価値判断的な主義主張を行う学問ではない。言語事実を客観的に

記述する（そして、可能であれば記述した現象が生じた理由を考察する）ことに重点を置く学問である<sup>(13)</sup>。

そこで本節では前節までの成果を基に、国語教科書という言語素材が生徒たちに何を提供し得るのか、その特徴について述べる。

繰り返しになるが、国語教科書には動詞を述語とする文が多用され、名詞を述語とする文は（動詞述語文と比べると）少数派であるということが分かった。これを叙述の類型の観点から捉え直すとどうなるだろうか。

2節でも述べたように、事象叙述文は動詞述語を基本、属性叙述文は名詞述語を基本とするものであった。つまり、国語教科書とは事象叙述文が多用される（属性叙述文はあまり用いられない）媒体であると言えるのである。

では、事象叙述文・属性叙述文とは、テキストの中でどういった働きをするのだろうか。ここでは、その一例を指摘したい。

事象叙述文とは、「物語を進める働き」をすることがある。例えば、次の例を参照されたい。

- (5) 岩男は、神戸の街に着いた。まずは商店街に向かい、喫茶店に入った。そして、カウンターに座った。

ここでは「岩男が神戸に着いた」「（岩男が）喫茶店に入った」「（岩男が）カウンターに座った」と少なくとも3つの事象叙述文が並んでいることが分かる<sup>(14)</sup>。そしてそれぞれの文は、登場人物（岩男）が時間の推移と共に行った動作を描いており、それによって（スタート地点→神戸の街→喫茶店へと）物語が進んでいる。

一方、属性叙述文はそうした性質を持たない。物語を進めるのではなく、「物語をそこで一度止め、キャラクタについての説明を行う」ことを主な働きとする。これも、例を挙げて確認していこう。

- (6) 神戸は港町である。そして、珈琲の街でもある。それだけではない。神戸は、ジャズの街でもあるのだ。

これは「神戸が港町であること」「（神戸が）珈琲の街であること」そして、「（神戸が）ジャズの街であること」を説明した属性叙述文の例である。

この例からも分かるように、属性叙述文は対象の属性について知識を増やす（つまり、対象をより知ることができる）ことはあるものの、事象叙述文とは違って物語を進める効力は無い。現に、(6)の文では、「神戸」に何か変化が生じたわけではない。

以上の考察から何が言えるかを述べる。

まず、国語教科書には事象叙述文が数多く見られるのであった。その事象叙述文とは、物語を進める文である。反対に教科書では少数派であった属性叙述文とは、物語を進める文ではなくキャラクターについて説明を行う文である<sup>(15)</sup>。このことはつまり、国語教科書の文章に触れるということは、事態の展開を数多く体験することであるとまとめることができるのである。

## 5. おわりに

以上、本稿では「叙述の種類」という概念を用いて教材を分析すると見えてくる知見を提供した。本稿で述べた内容をまとめると、以下のようになる。

- (ア) 国語教科書内に見られる文には、事象を述べたもの（事象叙述文）が非常に多い。
- (イ) 事象を述べる文は「物語を進める」働きをすることが多い。
- (ウ) よって、国語教科書を構成する文には、物語を進める働きものが数多く存在する。

また、引き続きこうした観点から研究を行うにあたり、今後の課題として次のようなものが挙げられる。

- (エ) 教科書内の本文以外の部分の調査
- (オ) 動詞・名詞以外の品詞（例えば形容詞）の調査

こうした知見が実践の場でどのようにいかされていくか、それは拙稿を目にした方々の技術に委ねられている。繰り返すが、基礎研究と（実践を含めた）応用研究の間の交流が途絶えてしまうのは、両者にとってマイナスでしかない。今後も何らかの形で両者の間に活発なやり取りが行われ続けることを願うばかりである。

本来であれば、本学会のような場が基礎研究と応用研究とを結びつける場として機能することが期待されていたのであろうが、現在の大学を取り巻く状況はそれを許してはくれない<sup>(16)</sup>。今後こういった手段で基礎研究と応用研究とを繋げていくのか、これは我々に残された大きな課題である。その大き過ぎる課題を前に、筆者一人の力は小さ過ぎる。しかし、せめて1つでも新しい基礎研究の成果を教育の場に提供するきっかけになればと思いい、拙いながらも本稿をここに残すことにした次第である。

#### 【注】

- (1) 「叙述の類型」に関する本稿よりも詳しい解説は、岩男（2019）の第2章を参照されたい。
- (2) 正確には3つなのだが、3つのうちの1つである〈指定叙述文〉については未だ研究が十分に行われておらず不明な点も多いため、ここでは扱わないことにする。
- (3) 条件が揃えば、形容詞や動詞を述語にとることも不可能ではないが、議論の簡潔さのために、ここでは名詞を中心に扱う。
- (4) これもやはり、条件が揃えば形容詞や名詞も不可能ではないが、先述の理由により、本稿では扱わない。
- (5) なお、このことから、名詞は単にモノ・コトの名前を表すだけではないし、動詞は単に動きを表すだけではない、つまり「特定の時空間上の出来事なのか否か」という世界の表し分けにも深く関わっていることが分かるだろう。工夫次第では、このことも教育に活かすことが可能だと考えられる。
- (6) この他にも、叙述類型論は助詞「は」と「が」の関係についても言及している。詳細は岩男（2019）を参照されたい。
- (7) COSMOSの取り組みやその成果については以下のURLを参照のこと。

<https://cosmos.education/#page1>



- (8) 以下の調査は教科書内の「おはなしをたのしもう」の部分についてのみ行ったものである。
- (9) ここでは、日本語の標準的な名詞述語形である「名詞＋だ／です／である」について調査を行っている。
- (10) このことを簡単に説明しておくとして、以下の(i)における「シェフ」は属性を述べており、(ii)における「シェフ」は登場キャラクターを指示している、ということである。
- (i) あの人、このレストランのシェフです。
- (ii) シェフは、ああ見えてとてもやさしい人です。
- (11) 以下の調査は「お話を音読しよう」の本文に登場する語彙だけに限る調査結果である。
- (12) 「登場人物の人がらをとらえ、話し合おう」の本文の調査結果である。
- (13) よって、言語学者に「最近の若者言葉はおかしいですね？」と評価的な意見を求めたり、「私の敬語を正してください」と依頼したりするのはお門違いである。
- (14) ここでは、主文末のみに注目する。
- (15) こうした事象叙述文・属性叙述文と物語の展開に関する指摘は言語研究の中でも特に時制研究において見られることはあるのだが、興味深いことに、それとはまったく別の文脈で、作家が小説の構成について述べた文章の中にも類例の指摘が存在する(平野(2009))。
- (16) 言うまでもないが、これは決して本学会運営陣の問題ではなく、社会のあり方の問題である。そして、その社会のあり方は日常の教育活動の延長線上にあることを忘れてはならない。

#### 【参考文献】

- 岩男孝哲(2019)『引用形式を含む文の諸相 ―叙述類型論に基づきながら―』くろしお出版。
- 佐久間鼎(1941)『日本語の特質』育英書院。
- 平野啓一郎(2009)『小説の読み方 感想が語れる着眼点』PHP 研究所。
- 益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版。
- 益岡隆志(2013)『日本語構文意味論』くろしお出版。
- 益岡隆志(編)(2008)『叙述類型論』くろしお出版。

三上 章（1953）『現代語法序説』刀江書院.

三上 章（1963）『日本語の構文』くろしお出版.

【付記】

本研究は JSPS 科研費（19K02789）の研究成果の一部である。

（いわお たかのり 神戸市外国語大学）